

ボランティアを組織化する条件をさぐる(討論の部)

樋口 直人 (徳島大学総合科学部)

藤村 正之 (武蔵大学 社会学部)

【討論の部について】

討論では、3者から発言があったが、紙幅の関係で、ここでは討論の部として、コメンテーターからのコメントとそれへの講演者リプライのみを掲載した。

■コメンテーター（樋口直人）からの質問

◎ボランティアは、単なる資源配分の問題か

1つ目は、やや専門的な感想です。報告で挙げられていたポランニーの「交換」「互酬」「再分配」という3つの類型は、ボランティアに関する議論ではよく使われます⁽¹⁾。けれども、単なる資源配分の1類型としてボランティアを考えてしまうと、見過ごされてしまうものがあるのではないか、という気がします。

◎「システム統合」と「社会統合」

ハーバマスというドイツの哲学者・社会学者が、「システム統合」と「社会統合」という言葉を使って現代社会の構造と問題点を説明しました⁽²⁾。つまり、「システム統合」とは国家や市場のレベルでどう統合されているかを論じるときに使われます。「社会統合」とは、もっと下のレベル、我々が普段生活する世界での統合という話です。この2つが分かれていることに、あるいは「社会統合」の方が「システム統合」に取り込まれてしまうことに問題があるのだとハーバマスは言いました。福祉国家の危機といわれるものは、この2つがうまく機能しなくなっていることに起因するというのが、フランクフルト学派の見解になります⁽³⁾。

地域とボランティアの未来

◎ボランティアの二面性

ここで、ほころびが明らかになった段階で両者を媒介するものとして、ボランティアというものが出てくる、と考えられるわけです⁽⁴⁾。そのときに、一方では「システム統合」がうまくいかないことの補完として、ボランティアが要求される。そうであるがゆえに、国家の側がボランティアの必要性を熱心に訴えるわけです。もう一方では「社会統合」の側で、新たな連帯・ライフスタイルの形態としてボランティアの意味が見いだされる。すなわち、楽しみとしてのボランティア、ということです。

つまり、市民的義務としてのボランティアと、楽しみとしてのボランティアという2つのヤヌス的な性格をボランティアは持たされており、引き裂かれた役割が与えられている⁽⁵⁾。つまり、ミクロなレベルと、マクロなレベルにおいて別々の役割が与えられているということがあると思うのです。

私、よくわからないのですけれども、長期的にみて、こうした性格に起因した矛盾は発生しないのか。つまり、ボランティアは今のところ、これから世紀を作っていく、というような形で、そのポテンシャルがいろいろいわれています。しかし、ボランティア自体からある種の矛盾が生じてきて、紛争が生じてくる可能性はないのか。これが第一の質問です。つまり、藤村報告の表1「資源配分の現代的形態」の図の部分に書いてある資源配分というのは、実は水平的ではなくハイラーキー的に編成されている。ポランニーの図式を使ったのでは、ハーバマスらのフランクフルト学派が指摘したシステム統合と社会統合の間の矛盾・紛争関係が十分浮かび上がってこない。両者のハイラーキー的編成に注目しないと、見えてこない部分があるのでないでしょうか。

◎ボランティアは社会の何を変えるのか

つぎに2番目の質問です。これは、単純に教えて頂きたいことです。『NGOとボランティアの21世紀』とかですね、そういう少々誇大妄想じゃないか、というタイトルの本も出ているわけです。ボランティアは、ある種いろいろな形で社会を変える、あるいは、より生き生きとした社会にしていくような

ものとして語られます。しかし、ボランティアが何を変えるのか、というが私にはよくわからないわけです。

藤村さんの議論を聞いている限りでは、社会における資源配分の割合を変えるもの、としてボランティアが捉えられるわけですが、割合を変えるところから何か生まれるのか。それとも、資源配分の様式 자체を変えるものになりうるのか。あるいは、いまいわれている「人間性の危機」、「人間の内的自然のほり崩し」といわれている状況を救済するようなものなのか。ボランティアの可能性というものを、中心的には、藤村さんはどこに見いだしておられるのか、第2に聞きたいと思います。

◎「郵便為替アクティヴィズム」としての「グリーンピース」

第3に、これは久保田さんの報告とも重なることなのですが、一方で、アメリカでは「郵便為替アクティヴィズム」といういわれ方をする参加形態があります。すなわち、自分では行動に直接参加するわけではなくて、資金的な貢献だけを行うことに由来しています。たとえば、「グリーンピース」という環境団体は非常に戦略的な動員の仕方をしていて、中産階級でエコロジーに関心のありそうな人たちの名簿を作って（実際には買うのですが）、ターゲットを定めてダイレクトメールを集中的に送るわけです⁽⁶⁾。ダイレクトメールを受け取って趣旨に賛同する人は、郵便為替で募金を振り込むわけです。つまり、お金を振り込むことによって貢献する。「グリーンピース」というのは、たとえば、核実験やっているところに乗り込んで反対するとか、いろいろと目立つことをやって、支持者たちを満足させ、資金を確保します。そこではほとんどの参加者たちが、単に郵便為替によって貢献する、という形の参加の方式があるわけです。こうした参加形態は、世界中で増えているといわれています⁽⁷⁾。

◎「あしながさん」が示唆するものは？

その一方で、ボランティアという言葉から一般に想定されているのは、もっと地域密着型のもので、直接的な参加が前提となっている。それで、この2

地域とボランティアの未来

つは参加の仕方が大分違うわけですが、それでは、「郵便為替アクティヴィズム」——たとえば「あしながさん」というのはそういう話だと思うのですが——から「地域密着型のボランティア」に対して、どのような示唆ないしインプリケーションがあるのか。この点について教えて頂きたいと思います。

(樋口直人)

■講演者（藤村正之）からのリプライ

◎ハイラーキーはある

3点、コメントというか質問をいただきました。

まず、第1点目については、ハバーマスを通じて理解するということで、ご指摘のありましたような整理をされて、その通りだと思いますし、この図は平面的に書いていますが、実際にはハイラーキーがありますし、ハイラーキー自身が、また時代やら場面場面で違うことがあると思います。

◎矛盾の出る場所という問題

それで、樋口さんが、矛盾点が出るのではないかとして挙げた「市民的義務としてのボランティア」と「楽しみとしてのボランティア」ですが、矛盾を抱えるだろうというのはそのとおりだろうと思うんですね。それで、それを抱えるのが、どの場面で誰に起こるのかということが考えるべきことだと思います。これは、もう、第一の質問から、第三の質問に近くなるんですけど、それは、個別のボランティアが自らの行動・意識で抱えるという場合もあれば、その矛盾がボランティア・コーディネーターのところで抱えてしまうということもありうるのかも知れない。コーディネーターは「市民的義務」を意識して、いろんな活動への目配りをもち、社会性を持ってやっていく必要がある。その一方で、個別に一参加者としてやっている人は、楽しくやって、形になっていけばいいことがある。とすると、その矛盾を処理せざるを得ないのが、ボランティア・コーディネーターという場合もあるだろう。あるいは、課題意識の強い、社会への関心の強いボランティアであれば、彼・彼女自身が、個別のボランティアの問題として、自分で抱えてしま

うということもあるかもしれない。

実際に矛盾はありうるだろうと思っています。そして、引き裂かれるだろう。引き裂かれる所がどこで出てくるかで、そこに耐えられるか耐えられないか(?)の違いが出てくるということが実際に起こっていることだと思います。予定調和もなければ、葛藤のない活動もない。

◎ボランティアも「ワン・オブ・ゼム」

それから、2番目は、私もどこをどのように考えればいいのかわからないところがあるんですが、ボランティアに関して、今回はこのような題でしゃべれという形でお呼ばれをしましたので、とりあえず、その主題でお話をしております。しかし、私もボランティアそのものが、社会を全面的に動かしていくなどということはありえないと思っています。あくまで、社会の傾向の一端であり、「one of them」である。それから、社会を変えるにしても、その効果はある一部の有効な活動に限られるだろうと思っています。もちろん、その効果だけでも、個々人の生活や意識においては重要なサポートたりうるわけですが。

◎「連帯の失敗」もありうるが、期待もできる

そのことを踏まえた上でどう考えるかということですが、現状でいわれるボランティア・NPOへの期待に関して、「市場の失敗」がいわれ、「政府の失敗」がいわれてきたのだとすれば、「連帯の失敗」ということも現実にも起こっているし、これからも起こるだろう。だから、なにか「市場」や「政府」がだめだから、NPOやボランティアに期待する、あるいは、それでうまくいくというような幻想はまったく持つべきではなくて、これからも大変厳しいことが続くんじゃないかなというふうに思います。

ただ、そのなかで、図3に挙げたような形の、これもやや図式主義的なところはあるんですが、その右上の象限のような形、すなわち【自由×社会的関連】の領域に意義付けを感じられる方がいるわけです。そういう方が、自分たちの活動を目にする形で起こし、そこでの結果が出て、自分たちも

地域とボランティアの未来

満足しているということはひとまず評価すべきではないかと思います。それから先、それが社会的な大きな活動に繋がっていくかどうかということについては、またその媒介になる方々、たとえば、ボランティア・コーディネーターの方々の課題や問題という側面もあるかなと感じています。

したがいまして、少なくともボランティアも「one of them」という位置づけが必要だろと見ていまして、過少にも過大にも評価しないということが必要だと思います。

◎理想にまつりあげない姿勢

ちょっと話が変わっちゃうんですけど、社会の動きや、社会をどう評価するかというところで、現状にいくつか問題があるということはそのとおりだといったときに、どこか現実にある国や制度、活動に理想において、そこを手放しで賞賛するという話の仕方は、私はあまり好きではないんです。好きでないというか、やってもどうかなという気がするわけです。たとえば、日本が30点だとしたら、スウェーデンが100点だよということはないはずで、スウェーデンもたぶん50点だろう。そうすると、やはりそれぞれの国が抱えている問題があって、樋口さんの話だと「システム統合」レベルの問題もあれば、「社会統合」レベルの問題もあるわけで、30点からみて、理想的な国を遠くにみて100点とするような考え方にはなるべくするべきではないということを思ってます。自分はそうじゃない議論の立て方をしたい。

したがって、ボランティアについても「連帯の失敗」も視野に入れて、現実の栄枯盛衰をクールに見ていく必要があるのではないかと思っています。

◎ “郵便為替アクティヴィズム”と「対面性の“重さ”への忌避感」

それから3番目のお話も、私もそのとおりだと思っています。気楽に参加できる行動を通して、それが社会性を持ってしまうことがある。それ自身は、最後の3×3表に出しました図の中において、現状で確かに起こっている。インターネットでさまざまな世論の動きがでてきてしまうというようなことが起こっているということ、そのような比較的最初の1歩が入りやすいもの、ハードルが低く入れて、それを通じて、ある種の社会的つながりが持てる

いう仕組みができてきている。樋口さんのいったように“郵便為替アクティヴィズム”というような活動が、情報ネットワークが普及すればするほど、より高まっていくのではないかな、というふうに見ています。その功罪がたぶんありえて、その両面について本格的な議論をしていかなければならぬと思います。

また、その種の活動から「地域密着型ボランティア」について、どのようなインプリケーションがあるか、という問題ですが、「あしながさん」には、対面していないことが持つ「参加形態の気楽さ」ということがあります、直接のサービスなり、直接の人間関係なりのある現場での、対面性が持ってしまう重さというのがあって、これにやはり現代社会で耐えるのはそう楽なことではない。だからこそ、多くのひとが去っていったり、1回はできるけれども、2回目はやりにくいということが起こってしまう。そこに関しては、だんだん我々が人間関係を継続してつなげていこうというのが難しい時代になってきてしまったという気がします。こういってしまうとここから先つながらなくなってしまうんですが。

◎「連帯」経験の加速度的喪失

3年ほど前に、私の大学の学生が教育実習にいき、中学2年生の社会科の授業を担当しまして、私もその授業を見回り見学にいきました。たまたま産業革命期の話で、様々な労働条件の悪さがあって、その話を紹介するわけです。そして、その学生は、労働条件の悪さの延長線上に、「団結」やら「連帯」が生まれてきて、「労働組合」みたいな、社会運動の萌芽が生じうることを、議論建てしたいということで、様々なイラストを書いて、話を持っていこうとしました。

そして、「こんなに働いている人が困っています。みんなならどうしますか？」と生徒さんたちに聞きました。そのときに、中学2年生の生徒の多くが元気よく手をあげて、教育実習生が指した最初の子がなんといったか、というと「はい、死にます」というふうに答えた。2番目の子は、「逃げます」と答えた。それで、皆も笑っている。その場面を見た時に、子どもたちのそ

地域とボランティアの未来

の場の受けねらいだというふうにも言えるのですが、他方、このようにも思いました。その時点の中学校2年ですので、生まれたのは1980年代半ばぐらいということになりますが、そうすると、生まれてからの15年間で、彼らの目の前で日本の社会の人たちが何かまとまって、それで社会が変わったという経験がおそらくマスコミ・レベルとしても彼らにはないのじゃないか。そうすると、みんながまとまって何とかしたという活動を見聞きしていないと、それに対するインセンティブが働かないし、そんなことがありうるとは思えないんじゃないかな。そういう気が、そのときにしました。そういう連帯経験の見聞も大事なんだな、でも日本では加速度的にそういう経験がなくなる方向に向かっているなという気もしました。

◎社会参加の日本の基盤の影響可能性

欧米も同じなのかどうか。私は欧米での生活体験もないし、そういう勉強もしていないですが、どこでもいまのような産業化・情報化が進むと同じように連帯の経験がなくなっていて同じになるのか、それとも、日本には日本的事情があるのか。

もし、日本的事情があるとすると、日本では周囲の目を気にして社会的なことに参加する、あるいは、義務的に行うということがこれまでのスタイルとしてありましたから、その社会の目・周囲の目がどんどん減っているということが、より連帯する方向に向かわなくさせているということなのかもしれない。これについては、仮説とか思いつきという水準ですし、質問への直接のお答えにはならなかったかもしれません、何か憂いをもった回答とさせていただきますということにいたしましょう。

(藤村正之)

【注】

- 1) 三つの交換形態については、Polanyi (1957, 1977) を参照。
- 2) これについては、Habermas (1973) で論じられている。
- 3) この点については Habermas より Offe の方が詳しく議論している。Offe (1984 : Ch.1) は、福祉国家自体を危機管理体制として捉え、経済－政治－行政－規範

(正統化) の3つのサブシステムからなるものとして定式化した。サブシステム間の相互作用が機能不全に陥った「危機管理の危機」と彼が呼ぶ状況は、紛争発生の構造的要因とされている。後にふれる「ボランティアが抱える矛盾」は、こうした構造的制約のもとで創り出される。

- 4) この点については、Offe (1996) を参照。
- 5) この部分は、中野 (1999) の議論に依拠している。
- 6) グリーンピースについては、Wapner (1996) を参照。
- 7) こうした「動員の技術」の詳細については、Oliver and Marwell (1992) を参考。

実践報告1：コミュニティとボランティア

脇町の「ふれあいいきいきサロン」づくりから

徳島県脇町 梶浦 豊子
(前・脇町社会福祉協議会事務局長)

◎脇町の概況

脇町の概況ですが、江原、岩倉、脇町の3町が合併し45年が経過しました。脇町の面積のうち73%が森林、山地で占められています。山地の町ですが緑とかいろんな特色をいかしています。たとえば江戸時代から明治時代にかけて阿波藍の集産地として栄えた伝統的な、勇壮なたたずまいの町並みが残っています。そういうものをうだつの町並みとして観光の面におきましても全国発信しています。

そのような山間地のまちで、取り組んで参りました福祉サービスを2つ程挙げます。

※脇町の数値概況

面積 111,09km²

世帯 6138世帯

人口 18,088人

高齢化率 24.37%